

# アメリカの陸軍将校が見た明治初期の日本陸軍

— エモリー・アプトン Emory Upton (1839-1881) 著報告集

『欧亜の陸軍 The Armies of Europe & Asia』(Portsmouth: Griffin & Co., 1878) 邦訳 —

布 施 将 夫

## 〈Summary〉

This article is a Japanese translation of *The Armies of Europe & Asia: Embracing Official Reports on the Armies of Japan, China, India, Persia, Italy, Russia, Austria, Germany, France, and England* (Portsmouth: Griffin & Co., 1878, by Emory Upton), pp. 1-12. In this part of the book, entitled, Army of Japan, Upton introduced and examined various aspects of the imperial army of Japan as follows: military institutions (the military academy, the school for non-commissioned officers, and the school of musketry and gymnastics), the organization of the army of Japan in 1875, (the War Department, the roles of the general officers, the Adjutant-General's Department, the organization of the army, and infantry), and other key matters. It is profoundly interesting for Japanese to learn about the imperial army early in the Meiji period from the viewpoint of the foremost theoretician of U.S. army professionalism, Emory Upton. He was sent on a world tour in 1875 to report on the state of the art of war, and he stayed in Japan from August 26th to September 23rd, 1875.

## 日本の陸軍

日本の陸軍への近代的な軍事思想の導入は、1867年に始まっている。この当時、フランス皇帝ナポレオン三世は、大君〔記者注：徳川将軍のこと〕の懇願にもとづき、軍事顧問団を日本へ派遣した。同顧問団の構成は次のとおりである。

司令官の参謀大尉 1 名

工兵大尉 1 名

砲兵大尉 1 名

歩兵中尉 2 名

騎兵中尉 1 名、および

下士官 15 名

この顧問団の目的は、相異なる各兵科の戦術や規則を日本陸軍に教えることであった。しかしその仕事をほとんど始められないまま、1868年の革命〔明治維新のこと〕の結果、フランス顧問団は本国に召還されたのである。

明治維新の主な目的は、大君によって数世紀もの間、篡奪されてきた世俗権力を帝（ミカド）に返還することであった。維新の副次的な目的だが、先の目的とほとんど変わらないほど重要な目的は、外国人の排除であった。彼らの傲慢な態度が耐え難いものになり、その影響力は、政府の復古的な信念にとって破壊的だと見なされたからである。

しかしながら、帝の新政府も外国人と接触し始めるとすぐに、大君の政府〔徳川幕府のこと〕と同様、軍事組織や軍事訓練の重要性に気づいた。下関の砲台の射程範囲内では手強い戦闘力を示した長州の兵士は、諸外国海軍〔四国艦隊のこと〕の強力さについて語ったし、江戸や横浜の外国陸軍は、近代的な陸軍のすぐれた技能や規律を実証したからである。

退位した大君の都に王権の創設を望んだ帝は、その理念を支援した大名らの同意を得て、1871年に行政命令を發布した。この命令が、帝国陸軍を出現させたのである。

同行政命令の条項にもとづき、薩摩藩主は、歩兵4個大隊と砲兵2個大隊を募集して帝に譲渡した。長州藩主も歩兵3個大隊を献兵し、土佐藩主は歩兵2個大隊と砲兵2個大隊、騎兵2個大隊を献兵した。

これらの軍隊〔親兵のこと。御親兵ともいう〕に、他の大名も自藩からの派遣団を加えることに同意した。このような軍隊は、江戸にとどまるよう命じられ、そこで国民軍の中心を構成することとなる。

この軍隊を編成し、訓練するため、外国の援助がふたたび切望された。

帝の申請にもとづいてフランスの皇帝は2つ目の軍事顧問団を任命し<sup>1)</sup>、同顧問団は1872年に日本に到着した。

この第2次フランス顧問団の構成は以下のとおりである。

司令官の中佐 1 名  
工兵大尉 2 名  
砲兵大尉 2 名  
歩兵大尉 2 名  
砲兵中尉 1 名  
歩兵中尉 1 名  
騎兵中尉 1 名  
工兵の補給部付き軍曹 1 名  
武器の製造を監督する武器監督 1 名、および  
全兵科の下士官 15 名

この軍事顧問団の目的は、日本の軍隊を再編し、教育することであった。加えて、日本の軍隊をしっかりと近代化の基礎に載せるのに必要な軍の制度を設立することもその目的であった。

フランス陸軍をモデルとして採用した同顧問団は、1872年7月にその仕事を開始した。

彼らの最初の仕事は、フランス軍の規則や戦術を日本語に翻訳させることであった。その間に通訳の力を借りて、理論的な教育や実践的な教育が、江戸で以下の諸隊に与えられた。

近衛兵の2個連隊 [1872年3月に親兵を近衛兵と改称]

近衛兵の1個騎兵大隊

近衛兵の2個砲兵中隊、および

1個工兵大隊

これに加え、近衛兵と同じ教育を受けるため、正規軍 [各地の鎮台のことと考えられる] の歩兵数個大隊や砲兵数個中隊、騎兵数個大隊が、江戸に毎年派遣されることとなる。

将校や下士官はしばしば集められ、戦術の原則や軍隊の規律を教えこまれた。作戦行動中の軍務を説明し、大軍の機動を教えるため、教育キャンプが毎年設置された。また射撃訓練も、歩兵と砲兵に仕込まれている。

フランス人将校の任務が指揮ではなく教育であったので、日本人将校は、自分の大隊や中隊の指揮権を保持した。そして練兵場で彼ら日本人将校は、実行を求められる部隊の機動を、通訳をつうじて学んだのである。

#### 陸軍の学校制度

フランスの軍事顧問団は、次のような学校を、江戸ですでに設けていた。

将校任官用の陸軍士官学校

下士官任官用の学校

小銃射撃や体操のための学校

獣医学の学校

応用工学の学校

フランス軍事顧問団は、江戸に武器庫も開設し、王子にはガラス工場を設置した。そして江戸の近郊には、新馬の補充所や砲兵のための多角形の実習学校を創設した。

#### 陸軍士官学校

日本の陸軍士官学校の目的は、モデルとして採用されたわが国 [合衆国] のウェスト・ポイント陸軍士官学校と同様<sup>2)</sup>、工兵をはじめとするあらゆる兵科の将校教育をおこなうことである。

競争試験によって集められる入学者の数は、毎年約150人になるが、このうち約140人が毎年卒業する。

特殊な兵科として見なされる工兵や砲兵、騎兵の教科課程は3年間であり、歩兵のそれは2年

間である。

最初の2年間の実用的な教育は、主として歩兵用に限定されており、この期間が終わると歩兵将校に任命された生徒は、それぞれの連隊におもむく。一方、工兵や砲兵、騎兵の将校に任官希望の学生は、もう1年間学校に残り、希望兵科の特質に習熟することになる。

教科課程には、以下のものが含まれる。

製図　　物理学

フランス語　　戦術

数学　　砲術

築城術

教育方式は、まず講義がなされ、その後に質問が続くタイプで、これはヨーロッパ大陸のあらゆる軍学校でなされているものと同じ方式である。この教授陣は日本人で、彼らはフランス人の将校か教授から教育を受けてきた人々である。

士官候補生の給料は、(配給品の)衣類や食糧に加え、1ヶ月当たり約3ドルである<sup>3)</sup>。

1873年から1875年の間に建設された陸軍士官学校の建物は、事務所や兵舎、大食堂、乗馬ホール、研究所からなり、これらの建物は、練兵場として使われる広い中庭を囲んでいる。新政府のエネルギーと陸軍士官学校の価値に対する新政府の高い評価は、これらの建築物の大きさや、それらが建てられた素晴らしい速さに示されている。

後者の例、すなわち建設の迅速さの例として、次のものがあげられる。1875年の春に焼失したほとんど300フィート〔約90メートル〕もの長さのある建物は、同年7月までに再建され、ほぼいつでも使用できる状態になったのである。

### 下士官学校

この下士官学校の目的は、あらゆる兵科の下士官教育をおこなうことである。歩兵の下士官になるための課程は18ヶ月間であり、砲兵や騎兵、工兵の下士官になるための課程は2年間である。

毎年、300人から500人ほどの生徒が下士官として卒業する。卒業の際に彼らは、以後7年間は軍務に服することを求められ、各自の技量にしたがって、伍長や軍曹の階級を受領する。なかでも特にすぐれたものは、陸軍士官学校に士官候補生として送りこまれ、将校になるための勉強をすることになる。

教育課程には、理論的なものと実践的なものの両方がある。理論的なものには、各兵科共通の部門や、各兵科に応じた戦術や規則が含まれる。実践的な教育のため、下士官は、歩兵2個大隊や砲兵2個中隊、騎兵1個大隊、工兵2個中隊に編成される。

教育は音楽家志望者にも施され、ラッパ手やラッパ卒の指導係になるべく訓練される。

閲兵や大演習では、下士官の大隊や中隊は近衛兵や正規軍とともに参加し、移動や展開の正確

さによって、普段受けている訓練の価値を示すことになる。

下士官の給料は、(配給品の)衣類や食糧に加え、1ヶ月当たり約 1.5 ドルである。

### 射撃・体操学校

この射撃・体操学校の目的は、正確な小銃射撃を教え、陸軍における肉体的な鍛錬を増進することである。この目的のため、現在軍務についているあらゆる連隊や部隊から同校へ、1 名かそれ以上の将校や下士官が、毎年送りこまれてくる。ここでの課程を終えると彼らは原隊に戻り、そこで教官として務めることになる。1875 年に、同校の教育を受けている将校や下士官兵の人数は以下のとおりであった。

大尉 21 名  
中尉 24 名  
少尉 26 名  
曹長 8 名  
軍曹 30 名  
伍長 32 名  
ラッパ手 40 名

### 日本陸軍の組織, 1875 年

#### 陸 軍 省

陸軍省(首脳部)は、陸軍大臣[陸軍卿のこと]1 名と、陸軍次官[陸軍大輔のこと]2 名から成り立つ。

業務の迅速な処理のため、陸軍省は、以下のような各局と各課に分割されている。

#### 第 1 局－全 6 課

第 1 課－公式文書や通信  
第 2 課－募兵  
第 3 課－参謀将校と軍学校  
第 4 課－軍事裁判  
第 5 課－収益と報告  
第 6 課－翻訳

#### 第 2 局－全 5 課

第 1 課－歩兵の人事  
第 2 課－騎兵の人事

第3課－軍馬の飼育

第4課－列車や補給物資の輸送

第5課－憲兵司令官

### 第3局－全2課

第1課－砲兵の人事

第2課－大砲や砲架、弾薬、その他の資材を購入し、製造するための砲兵の経費

### 第4局－全2課

第1課－工兵の人事

第2課－資材の経費

### 第5局－全9課

第1課－食糧と燃料

第2課－衣類や野営テント、要塞の備品

第3課－病院や（移動式）野戦病院

第4課－将兵の給与

第5課－第5局の規則

第6課－第5局の経費の訂正や会計監査

第7課－資材支出金の会計監査

第8課－次年度の費用見積りと恩給の支払い

第9課－陸軍省全体の総支出

### 第6局

この第6局は、1875年にはまだ編成されていないが、蝦夷地〔北海道の古称〕の軍事を監督する予定の部局である。編成されるまでの同局の任務は、第1局の将校によって行われる予定だ。

また、陸軍大臣の通信に責任をもつ小さな部局も存在する。この部局は、少佐2名と大尉3名からなるもので、彼らは、参謀将校と前線将校の両者から選抜されている。

ところで、陸軍大臣は将官である。第1局の局長は少将か准将のどちらかだろうが、第2、3、4局の局長は准将である。第5局の局長は監察官である。

各局の局長補佐は大佐か中佐であり、各課の課長は少佐である。

## 将 官

現存するのは、次のとおり。

大将 1 名

少将 3 名

准将 12 名

12 名の准将のうち、3 名は議会のメンバー〔新政府の役人のこと〕であり、もう 1 名は法務次官である。

## 軍 務 局

この軍務局は、1876 年でもまだ、十分には編成されていない。

業務処理のため、同局は 7 つの課に分割されている。

第 1 課－通信に責任をもつ

第 2 課－アジアに関する軍事情報や統計資料、地理情報を収集する

第 3 課－アメリカやヨーロッパに関する前述の情報や資料を収集する

第 4 課－戦史を研究し、叙述する

第 5 課－地理

第 6 課－地勢

第 7 課－各種の記録の印刷や保存、翻訳

## 陸軍の編成

1875 年の日本陸軍で、平時編成のものと戦時編成のものは、以下の諸表に示されるように構成されていた。

## 正 規 軍

兵 科	部隊数	平時編成の 人数 <sup>4)</sup>	戦時編成の 人数 <sup>5)</sup>	平時編成人 数合計	戦時編成人 数合計 <sup>6)</sup>
歩兵	14 個連隊、すなわち 42 個大隊	640	960	26,880	40,320
騎兵	2 個大隊	120	150	240	300
砲兵	9 個大隊、すなわち 18 個中隊	120	山砲 160 野砲 130	2,160	2,700
工兵	9 個中隊 6 個中隊	120 60	150 80	1,080 360	1,350 480

沿岸防備 重砲兵	9 個中隊	80	100	720	900
計				31,440	46,050

## 近 衛 兵

兵 科	部隊数	各隊（大・中隊） の隊員数	戦時編成を常に 維持
歩兵	2 個連隊，つまり 4 個大隊	672	2,688
騎兵	1 個大隊	150	150
砲兵	1 個大隊，つまり 2 個中隊	130	260
工兵	1 個中隊	150	150
	1 個中隊	80	80
計			3,328

## 総 兵 力

兵 科	部隊数	平時編成の人数	戦時編成の人数
歩兵	16 個連隊，つまり 46 個大隊	29,568	43,008
騎兵	3 個大隊	390	450
砲兵	10 個大隊，つまり 20 個中隊	2,420	2,960
工兵	10 個中隊	1,230	1,500
	7 個中隊	440	560
沿岸防備 重砲兵	9 個中隊	720	900
計		34,768	49,378

1874 年の日本の人口は 33,008,430 人であったので，総人口に対する平時編成の軍人の比率を  
言うと，1,000,000 人分の 1,000 人ということになる。

## 歩 兵

軍隊というものがどれほど完全にヨーロッパ化（つまり近代化）されているかは，歩兵の編成  
から推測することができよう。

1 個連隊は 3 個大隊からなり，各大隊は 4 個中隊からなる。

（連隊の）野戦将校と参謀将校の構成は，以下のとおりである。

大佐 1 名，連隊長

少佐 3 名，3 個大隊の大隊長

大尉 1 名，連隊副官



中尉 3 名，大隊副官

中尉 1 名，連隊主計官

少尉 3 名，大隊主計官

少佐 1 名，連隊高級医官

大尉 3 名，大隊の軍医

戦時になると各大隊は，軍医の人数を増やす。

中隊の構成は以下のとおり。

大尉 1 名

中尉 2 名

少尉 2 名

上級曹長 1 名

補給部付き軍曹 1 名

軍曹 8 名

伍長 16 名

伍長代理 1 名，そして

兵卒 160 名

戦時になると兵卒の人数は，240 人まで増やされる。

以上のような歩兵と同様に，砲兵や騎兵，工兵，軍務局，補給の各部門，軍医団，そして軍用列車にも，ヨーロッパ式の，というよりフランス式の組織の痕跡が残っている。

祖国を守るため，あらゆる市民に武器をとる義務があると認識されていたため，兵役は，強制的なものとされている。

新兵は徴兵により召集され，3 年間の入営期間が満了すると，彼らは予備役に入る。

日本兵の身長は，5 フィート 1 インチから 5 フィート 3 インチまで [約 150 センチメートル台後半] である。

糧食は主として米と魚であるが，肉も週に二回配給される。パンもまた糧食の一部となるが，パンを製造する技術が不足しているため，兵士は，米の方をはるかに好んでいる。

軍服は完全にヨーロッパ式である。夏用の軍服は白いズックで作られ，冬用の軍服は濃紺の布地で作られる。

歩兵は，スナイドル銃やエンフィールド・ライフル銃，そして，サーベル式の銃剣で武装している。

江戸の兵器廠では，前装式のマスケット銃が，アルビーニ型の後装銃へと迅速に改造されつつあった。

兵舎は，きわめて頑丈で堂々とした建物である。江戸の近衛兵の兵舎は，何エーカーもある四角い中庭を囲んでおり，その中庭はすべて，なめらかに砂利が敷かれている。各建造物には，1

個連隊が丸ごと収容される。数個中隊は上の階に宿営し、下の階には、オフィスや食堂、図書閲覧室、貯蔵室が入っている。清潔さを保つ国民的習慣は、温かい水に入浴したり冷水浴をしたりするのに十分広い浴場設備によって奨励されている。

病院も兵舎同様、その設備のあらゆる点で近代적である。営倉は明るくて風通しが良く、刑罰が近代的な軍法に基づいて執行されているという形跡がある。高級将校の訪問があると、犯罪の軽微な在監者は皆、釈放される。この恩恵は、われわれ海外からの訪問者が視察した場合、監禁されていたたった一人の囚人に施された。

日本は、古代文明から近代文明に突如移行したので、このことは後に、いまだかつてない歴史上の奇跡となるだろう。この変化のなかでも、陸軍ほど目立つところはない。新政府は、旧体制下の大名により自発的に提供されてきた訓練されていない群衆「藩軍のこと」のかわりに、国民軍を用いる必要性を正しく認識した。それゆえ新政府は、数多くの戦闘の成功で有名な国民に支援を求めたのである。

この求めに応じ、拔群の世評をもち、陸軍大臣に対し責任を負う、傭兵ではない将校たちが、その職務に任命された。

フランス人将校団の熱意や知性、企て、およびその成功は、陸軍改革のためのあらゆる対策でねたみもなく彼らを支持した新政府の賢明さと同様、驚くべきことではなかった。どこに行こうとわれわれは、彼らの技能の証を見た。たとえば、陸軍大臣により同席を寛大にも許された江戸の閲兵式でわれわれは、近衛兵の4個大隊や下士官の2個大隊、騎兵2個大隊が、称賛に値する正確さで演習するのを拝見した。

江戸から何百マイルも離れた琵琶湖や大阪でもわれわれは、フランス流の戦術が日本人将校によって、小戦闘や、連隊や大隊の学校にうまく適用されているのを目撃した。大阪の兵舎やガラス工場では、江戸においてと同様の清潔さや秩序、組織が広く行き渡り、普及していた。

しかしもし、日本陸軍が、フランス風の組織の痕跡をまがいなく身につけるとすれば、日本陸軍は、演習や訓練のなかにもフランス軍の思想の跡を同様にもつはずであろう。フランス軍ではかつて、次のような（豪傑風の）姿が称賛された。兵士らはひどい身ごなしで、閲兵式や演習では武器が揺れ動き、だらしない行進に陥ったように見えたのである。彼らの姿は、イギリス軍やドイツ軍の兵士らの正確さや堅実さとはまったく対照的であった。

しかしながら、最近修正された戦術では、兵士個々の自律性がますます求められる。そして、これまでの経験が示すところによれば、そうした自律性は、軍隊にいる時の厳しい訓練と堅実さによってのみ開発されうるものだ。日本には欧米からの観戦武官がいるので、そうした墮落した（フランス風の）慣行が、日本の軍事組織に根付かぬよう、彼ら観戦武官が新政府に注意を促すことが望まれる。

ただし、その他のあらゆる点では、日本軍再編の進展は、賞賛できるものである。わずか3年以内に、軍事制度はすべて創設され、多くの建物が建てられた。また、この同じ3年間は、あらゆる部隊や兵科の統一された教育システムを始めるのにも十分だったのである。これらの事実は、

日本が、財政の窮迫にもかかわらず、自国陸軍に関して追求し続けている啓蒙政策の十分な証拠である。

すでに日本は、その（すぐれた）見通しの報酬を獲得してきている。1868年の時点では、砂上に建てられた明治新政府の基礎は、現在、岩の上に落ち着きつつある。いくつかの暴動〔たとえば1874年の佐賀の乱など〕は、本格的な反乱に発展する前に迅速に鎮圧されてきた。その上、台湾や朝鮮における軍事的成功〔1874年の台湾出兵や1875年の江華島事件など〕は、次の推測の根拠を提供している。その推測とは、日本が、国内の発展にもはや満足せず、世界史のなかで重要な役割を担う運命にある、というものである。

## 解題

ここに訳出してきたものは、Emory Upton, *The Armies of Europe & Asia: Embracing Official Reports on the Armies of Japan, China, India, Persia, Italy, Russia, Austria, Germany, France, and England* (Portsmouth: Griffin & Co., 1878), pp. 1-12である。この書物はもちろん未邦訳だが、以下では仮に『欧亜の陸軍』と記す。

アメリカの陸軍将校E・アプトン（職歴最高位、少将）は、1875年の夏から1年半、世界各国の陸軍を調査・研究するために視察旅行をし、研究結果をまとめた報告書を1877年末に陸軍省軍務局へ提出した<sup>7)</sup>。翌78年に『欧亜の陸軍』として出版されるこの報告書のなかでアプトンは、諸外国の軍事体系を順に紹介するものの、結論ではドイツの参謀システムを模範と見なす。たとえば彼は、1870年の普仏戦争におけるプロシアのようにすぐれた「結果（results）を可能にするため、われわれは自国のシステムを放棄すべきで、軍務局と監察局を統合すべきだ」と提案した。アメリカの軍務局がプロシア式の参謀システムに発展しうる可能性を見いだしていた彼は、監察局を統合した軍務局に人事課、情報課、戦史課という新しい三課を備えることも提案する。

なお、当時のベルリンの大参謀本部には、人事を担当する中央局や情報局のほかに、鉄道課が並置されていた<sup>8)</sup>。この重要な鉄道課の代わりに、（ベルリンでは支部の一課にすぎない）戦史課の導入を彼は勧めたことになる。戦争準備に関するアプトンの提案全体は、彼の支持者であったウィリアム・シャーマン将軍でさえ「あまりにも急進的すぎる」と数年後に認めたほどのものであった<sup>9)</sup>。だがそういうアプトンですら、みずから模範と見なしたドイツの参謀システムを变形してまで鉄道課の設置をなおざりにした以上、軍事における鉄道の重要性はやや軽視していたと考えられる。

とはいえ、アメリカ陸軍正規軍の先見的な理論的改革派であったアプトンは、後世、高く評価された。R・ブラウンによる「エモリー・アプトン将軍——陸軍のマハン」（1953年）とS・アンブローズの「エモリー・アプトンと『欧亜の陸軍』」（1964年）、そしてB・クーリングの「エモリー・アプトンの失われた章：覚え書き」（1973年）がそれである。いずれの論説も、アプトンのすぐれた著作の革命性と、それゆえに彼の改革案が当時の陸軍に受け容れられなかった悲運

とを強調したものであった<sup>10)</sup>。アプトン自身、自分の改革案をアメリカが軍事政策として採用しないだろうと考え、ひどく悲観的であった。その後彼は、『欧亜の陸軍』の次の著作となる『アメリカの軍事政策』の出版を待たず、1881年に自殺したのである<sup>11)</sup>。このような最期が、彼の悲劇性をいっそう助長したと考えられよう。

『欧亜の陸軍』には、アプトンが日本滞在中に執筆した日記「日本からの手紙」が収録されている。今後はこの部分も邦訳し、紹介してみたい。

## 注

- 1) ここに「フランスの皇帝」とあるが、ナポレオン三世は、1871年にはすでに退位している。ゆえに、「フランスの政府」と記載した方がいっそう正確であったと考えられる。西野嘉章、クリスティアン・ボラック編『日仏修好通商条約締結百五十周年記念特別展示 維新とフランス——日仏学術交流の黎明』東京大学出版会、2009年、164頁参照。
- 2) 同上、174－175頁によると、フランスのサン＝シールの士官学校が、日本の士官学校のモデルや手本になっていたとされる。アプトンの愛国心が垣間見えよう。
- 3) 1871年当時、1ドルは1円に相当した。当時の大工の日当は50銭、銭湯代は1銭で、酒一斗の代金が1円であった。[http://crd.ndl.go.jp/reference/detail?page=ref\\_view&id=1000030573](http://crd.ndl.go.jp/reference/detail?page=ref_view&id=1000030573) 2017年8月25日アクセス。
- 4) 原文に説明はないが、歩兵・騎兵の場合、1個大隊の人数であり、砲兵・工兵・沿岸防備重砲兵隊の場合、1個中隊の人数だと考えられる。
- 5) ここでも歩兵・騎兵の場合、1個大隊の人数であり、砲兵・工兵・沿岸防備重砲兵隊の場合、1個中隊の人数だと考えられる。
- 6) 砲兵の戦時編成は、山砲12個中隊と野砲6個中隊を含んだと考えられる。
- 7) E. Upton, *The Armies of Europe & Asia: Embracing Official Reports on the Armies of Japan, China, India, Persia, Italy, Russia, Austria, Germany, France, and England*, Portsmouth: Griffin & Co., 1878, pp. iii-vii. アプトンを中心とする手紙の紹介部分から。なお、同書の扉の著者紹介にも、Major-General Upton, (少将アプトン) とある。
- 8) *Ibid.*, pp.219-221, 319, 329-331.
- 9) S. Skowronek, *Building a New American State: The Expansion of National Administrative Capacities, 1877-1920*, Cambridge: Cambridge UP, 1982, p.92.
- 10) R. C. Brown, "General Emory Upton- The Army's Mahan," *Military Affairs*, Vol. 17, No. 3 (1953), pp. 125-131. S. E. Ambrose, "Emory Upton and the Armies of Asia and Europe," *Military Affairs*, Vol.28, No.1(1964), pp.27-32. B. F. Cooling, "The Missing Chapters of Emory Upton: A Note," *Military Affairs*, Vol. 37, No. 1 (1973), p13f.
- 11) Paul A. C. Koistinen, *Mobilizing for Modern War: The Political Economy of American Warfare, 1865-1919*, (Modern War Studies.) Lawrence: University Press of Kansas. 1997, p.69f.